
私の番

森 祐希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の番

【コード】

N5190T

【作者名】

森 祐希

【あらすじ】

二十一年振りに書かれた一篇の小説の物語。
彼女はそこに、いったいなに見出したのか。

かべの近くにいます。が五こありました。

左から三ばん目のいすに、男の人が下をむいてすわっていました。その前にはその男の人と同じようにうつむいた一人のかわいいりぼんをつけた、おんなの子がいました。

そこにでん車がきたことをつげる声がかかります。

おんなの子は思いきったようにかおを上げます。

だんだんとでん車が近づく音がします。

しかしおんなの子は前へとすすみます。

男の人はやつとなかなか気づきませんが、もうすぐのところできづきました。

男の人はいつもどんかんです。

その男の人はすこしどうしようか、とまようかおをしました。

どうしてすぐにたすけてあげないのでしょうか？

しかしすぐにおんなの子のもとへとかけつけます。

やさしく、てをつかみ、ひき止めます。

でん車が止まる音がします。

つぎにドアがひらく音がしました。

たくさんの人の足音がします。

おとなのひとはこういうことにはむかんしんです。

手をもたれたまま、おんなの子はじつと男の人をみつめました。

そんなおんなの子のとなり男の人もじつと立っています。

やがておんなの子の手をひいて、さっきのいすにすわらせて、じぶんもとなりすわりました。

二人はただだまっていました。

そしておんなの子からしゃべりかけます。
そこでおんなの子はなぜあんないけないことをしたのかせつめいをします。

男の人がそれに対してそんなことはいけないよとせつとくをしました。

これからおこるゆめのようなたのしいはなしをたくさんしました。
やがておんなの子と男の人はちがうところに行きます。

どうやらおんなの子はこれから生きていくことをきめたようです。

めでたしめでたし。

2

場所は同じく駅構内。

ただそこにいるのは少女だけである。

さつき、自分がした会話を思い出す。

最近の自殺を題材としたドラマや携帯小説なんかじゃよく語られる会話。

生きることへの無反省の賛美。

全体的に何処となく精彩を欠いた話。

思い出しただけでもぞつとして、鳥肌が立つ。

そして自分がついた嘘。

これもまたありがちな自殺の理由。

つまりない理由。

自殺だと思っているが、実際には他殺である。

彼らは自ら死んではいけない。

殺されたのだ。

なにかに。

そんなロマンスの成れの果て。

鞆から電話を取り出し、どこかに掛ける。

「……………はい、……………ええ今、終わりました、暫くは大丈夫かと。そうですね……………此処にいる私たちにできるのはただ、ただ生きること。生きる義務はあっても、死ぬ権利など誰にもありません……………いえいえ、お礼なんて……………方法ですか、それは企業秘密です。まあちつぽけな虚栄心を満たすとも言えますか。はい、事前の契約通り料金は振り込みでお願い……………」

会話が途中で遮られる。

なにかが地面に落ちる音。

電車のブレーキ音。

激しい衝突音。

人身事故による運行停止のアナウンス。

そんなありふれたアナウンス。

終

3

一九九〇ねん一月二二日

きょうはおともだちのエリちゃんのおたんじょう会でした。
その子はとてもうれしそうでした。

わたしもうれしかったです。

みんなでおはなしたり、あそんだりしました。

ただひとりのおんなの子だけぽつんとさびしそうにしました。

わたしはその子もなまにいれてあげようとおもってはなしかけてあげました。

はじめはめいわくそうにしていたましたが（人にしつれいだとおもう）

やがてだんだんとおはなしするようになりました。

けどそのおはなしでその子はよんでいたほんのはなししかしま
せんでした。

おつじょうのなんとかとか、からまるきょうだいとか、

むずかしいことばかりを言っていました。

もっとたのしいおはなしをしたらいいのに。

おたんじょう会のあと、いえにかえって、

わたしもおはなしをかんがえることにしました。

たのしいおはなしをかこうとおもいましたが、

すこしだけかなしいこともいれました。

よんだらナオキくんなんかはないてしまうかもしれません。

このにつきのつづきにかいておきます。

4

二〇一一年五月二十一日

久しぶりに休みを取って実家に帰郷した。

田舎はいい。だなんてよく言われるが、虫が出たり、近くにコン

ビニがないなど面倒な事が多い。

それに人に会ったたびに「結婚したの?」「彼氏は?」なんて聞かれる。

余計なお世話だ。

田舎のこういう行き過ぎた近所付き合いはあまり好きじゃない。

何年振りだろうか、私の部屋に入る。

部屋は上京してからとあまり変わってないように思う。

掃除はちゃんとしてくれていたようだ。

母に感謝。

本棚を見る。そこは少女漫画で埋め尽くされていた。いちご畑のように甘酸っぱい。萩尾望都もある。

たしか転校していった子から貰ったものだったはず。

小学生のとき、その子は本ばかり読んでいてあまりクラスには馴染んでいなかった。

高校で同じクラスになったときは出席番号が近いということもあって、それなりに喋るようになった。

しかし二年の途中で転校して私より先に東京に行ってしまった。それ以降連絡もない。

今、彼女は小説家となっているようだ。去年、なにか賞を貰っていたのをテレビで知った。その本は買ってない。

そんなことを思い出しながら見ていると、その中に一冊、場違いであるかのような黒い手帳のようなものがあった、パラパラと見る。小学生のときの日記だった。恥ずかしげもなくいろんなことが書かれている。その中の一ページで手が止まる。

ちょうどその子について書かれていた。幼いながらもいぶんと残酷な考え方をしている。彼女とどこか少し壁があった理由がわかった。それを覚えていなかった今の自分も残酷だろうか。

その日記のあとに小説があった。

すぐさま見たことを後悔する。なにを考えていたのだろうか、恥ずかしいことこの上ない。

誰かに見せていないか心配になったが、こんな稚拙な文章を覚えている人などいないだろう。そう思い込み抑える。

しかし私も小説なんて書いていたのか、書いたことをまったく覚えておらず、自分でも意外であった。

今でも書けるのだろうか。そう思い「めでたしめでたし」のところに線をして、この話の続きを書くことにした。

最初はすこし考えたが、案外スラスラと書けた、十分かそこらか書き終わって初めから読み返す。

誰に向けたものではない苦笑い。

自分で書いたものだけど展開が急でよく分からないし、詩もどきで気取っているところが鼻につく、論理もめちゃくちゃで、わけがわからない。当たり前だがプロのものとは違う。

それに結末を濁しているところに、どこかしらあざとさを感じた。少女が落とされたのか、男が落ちたのか、それとも二人とも落ちたのか。

私は少女だけが落とされたと考えている。

「……そうか」

私は小さくつぶやいた。

きっとこの落とされた少女は私だ。

幼い頃の私、少女だった頃の私。

この話は幼い私の死で終わる。

それが結末であり、また事実でもある。

幼い私の死と引き換えに、今の私が生きている。

最後まで書くことで本当に彼女は死んでしまったのだろうか。

私が殺した。

それでもきつとこの物語は、いつか書き終えなければならなかったのだろうか。

この私の手で。

そんなことを考えながらふと窓を見た。

いつの間にかもうあたりは真つ暗、田舎は日が暮れるのが早いとはよく聞ぐが、こんなに早いとは。

台所で母が私を呼んでいた。「今、行くよ」と言って、ドアノブに手を掛ける。

そのとき窓の向こうの、月も照らさない遠くの暗闇から、ほんの微かな足音が聞こえたような気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5190t/>

私の番

2011年5月28日00時25分発行